

命のオアシス

[聖書]詩編 133 編 1～3 節

見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り／衣の襟に垂れるアロンのひげに滴り ヘルモンにおく露のように／シオンの山々に滴り落ちる。シオンで、主は布告された／祝福と、とこしえの命を。

[序] 家庭の原風景・食卓

この度は大阪教会の礼拝でご奉仕させていただく機会をお与えくださり、有難うございました。また午後にはシンガポール会をさせていただきます。シンガポールへは1995年5月に赴任し、翌年国際日本語教会を立て上げ、岡村直子先生にバトンタッチして2005年の正月に帰って参りました。在任中皆さんがたの貴いお祈りと献金のお支えを頂き、任務を無事全う出来ましたことを、改めて御礼申し上げます。引続きシンガポール国際日本語教会のためにお祈りをお願いいたします。

帰国後、約2年弱、巡回して全国の諸集会・諸教会で宣教師報告をさせて頂きました。2007年1月から1年間の約束で、川越教会の臨時牧師を務めました。そしてシンガポールへ戻る予定でおりましたが、川越教会に適任者が与えられず、再建の見通しが立つまで腰を据えるよう、神さまから命じられてしまいました。一応 30 人の群れになることを目標にしています。どうぞお祈りにお覚えください。

さて、二年前の NHK・TV 朝の連続ドラマ「芋たこなんきん」は大阪が舞台でしたから、皆さんご覧になったことでしょう。祖父母・夫婦・妹・5 人の子供たちが、いつも一つの食卓を仲良く囲んで、頂きますと手を合わせてから食事をする、心なごむ家族ドラマでした。私はこの場面に惹かれて、毎日楽しく観ました。この食卓こそが日本の庶民の家庭の原風景ではないでしょうか。

どの親も一番願うことは「子供たちが皆仲良く食卓を囲んでくれる家庭でありたい」ということだと思います。ところが兄弟が仲良く暮すことが、これまた何と難しいことでしょう。兄弟が一番身近なライバルだからでしょう。聖書の中の最初の殺人事件は、人類最初の夫婦といわれるアダムとエバの家庭で、息子のカインとアベルの間に起こっています。兄が弟を殺す——これが人類最初の殺人事件。私たちの現実生活では、子供たち皆仲良く食卓を囲むということが、どれほど難しいことかを物語っています。ではどうしたらよいのでしょうか？

[1]働き者の兄と姉

イエス・キリストがなされた「放蕩息子のたとえ話」を、フランスの小説家アンドレ・ジイドが 世界最高の文学作品だと絶賛して、こう言っています。「聖書がまさに神の手による書物であるということは、これを読めばわかる。このような素晴らしい作品は、人間のよく書き得るものではない」。

ある父親に二人の息子が居ました。成長して独立する年頃になりました。弟息子の方が待ちきれなくなって、父が死んでからでないともらえない財産分けを、早くして欲しいとせがみました。そして分けてもらおうと、数日ならずしてそれを全部金に換え、遠い地へ出て行って、遊び暮らしに使い果たしてしまいました。金が

無くなったら、今まで取り巻いていた人たちが皆去ってしまいました。運悪くその地方が飢饉に見舞われ、やっと拾われた農家で、彼はユダヤ教徒やイスラム教徒が汚れた動物と忌み嫌う豚の世話をさせられました。

人生のどん底に落ち込んで、彼は我に返りました。誰も助けてくれず、一人ぼっちで拠り所のない自分。父の居る家が心に甦って来ました。「もう息子と呼ばれる資格はない。でもあの父のこと。雇い人の一人としての居場所ならば、与えてくれるに違いない。とにかく帰ろう」。ところがみすぼらしい姿になって帰って来た息子を、父は家から飛び出してきて、抱き締めてくれました。そして良い着物を着せて、祝宴を開いて喜んでくれました。

さて今度は、父を助けて働いてきた孝行息子の兄の番です。彼は畑仕事から帰って来ても、腹を立てて、にぎやかな家の中に入ろうとはしません。家から外に出てきてなだめようとする父に、兄息子は怒りをぶちまけています。どうしたことでしょうか。それは親からもらった金で好き勝手に遊びまわり、一文無しの乞食になって帰って来た弟が、盛大な食卓についていたからです。真面目に働いて親を助けている自分が大事にされるのは当然だが、この怠け者が大事に扱われていることが、我慢ならなかったのです。

父が簡単に弟を家に入れず、その不心得を叱り付け、折檻し、長々と説教する。畑仕事をして帰って来た兄も、自分たちがどんなに心配していたかお説教に加わり、「お父さん、これぐらいで勘弁してやりましょうよ」と執り成すことで、やっと家に入れてもらえたという経過でもたどれば、兄は機嫌を損ねないで、弟を勘弁してやったのかもしれない。でもそんな筋書きを経なければ、兄と弟が食卓を共に出来ないのでしょうか。何ともやりきれない思いに駆られませんか？

川越教会では教会学校の分級も、礼拝説教も、「聖書教育」のカリキュラムに従っていますが、今日の学びはルカ福音書の10章の終わり、マルタとマリア姉妹の話です。この話もまた有名な箇所ですね。イエスさまと弟子たち一行が彼女たちの家を訪れました。マルタはさっと台所にたち、食事の準備に取りかかりました。彼女はイエスさまをおもてなし出来ることが嬉しくてたまらなかったことでしょう。あれも作ろう。これもお出ししたい。でも大勢のお客です。せわしなく立ち働く彼女が、ふと居間に目をやりました。

妹のマリアがイエスさまの足もとに座ってお話を聞いています。マリアのその姿が目に入った途端に、マルタの心にマリヤに対する不満が、むらむらと生じました。そしてその気持ちを抑えることが出来なくなった彼女は、あの兄と同じ様な行動に出てしまいました。「主よ、わたしの妹はわたしだけにもてなしをさせています。何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。

どちらの話も、働き者の兄・姉が弟・妹に腹を立てています。年上の者の方が思慮も力も勝っていて、年下の者よりも良いことが出来るのは当然です。だから良く働いて人を助けることが出来たことを、神さまに感謝して、喜んでいてもよさそうなのに、それが難しいのですね。良く出来る者は、何時もほめられ大事にされていないと、気が済まないのです。

一方良く出来ない者も、良く出来る者だけがいつも褒められ、良い地位を与えられるのを何時も目の当たりにしていると、出来ない自分に劣等感を抱き、次第に無気力になっていきます。こうして互いに比べ

合うことで、心に生じる優越感と劣等感が、仲良く一緒に暮らす幸福を、破壊していくのです。

我がまま勝手な弟がみじめな姿で帰って来た時に、もしも親孝行で働き者の兄が、「よく 帰ってきたね。よかった、よかった。お父さん良かったね！」と喜んで、いそいそと弟の隣りに座ったとしたら、どうだったでしょうか。もしも姉のマルタが、ご馳走を三皿作りたところを一皿にはしょって、「イエスさま、私もお話を聞かせて下さい」と、手を拭きふきマリアの横に座ったらどうだったでしょうか。そういう兄と弟、姉と妹に、どうしたらなれるのでしょうか。

[2] 神さまと一緒に礼拝する喜び

今日の聖書の言葉「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」は、新改訳聖書では「見よ、兄弟たちが一つになって共に住むとは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう」、カトリックのフランチェスコ会訳では「見よ、兄弟がむつみあって住むとは、なんとうるわしく、こころよいことか」となっています。それを新共同訳では「共に座っている」と、原語の翻訳が「一つに睦みあって住む」から「共に座る」に簡略化されています。そうです。兄弟が睦み合い一つに結ばれて暮らしているから、一つの食卓を囲んで座れるのです。ですから座るといふ動詞には、住む・暮すという意味が込められているのです。

そして、この詩編には「都に上る歌。ダビデの詩」というサブタイトルが付いています。国中からイスラエルの全部族がエルサレムの神殿に集まって来ます。有力な指導者の間の勢力争いもなければ、党派に分かれての対立抗争もありません。人々が一年ぶりの再会を喜び合って、それぞれ定められた席に着いて、仲良く一緒に神さまを礼拝するのです。

神さまは、エルサレムの神殿で一つになって礼拝を捧げるイスラエルの民に、祝福と永遠の命を与えると布告なさいました。ダビデはその祝福と永遠の命を、アロンの頭に注がれた大祭司任職の油に例えています。昔アロンは特別に調合された高価な油を、頭にたっぷり注がれて、大祭司に任職しました。その油は頭からひげを伝わり、大祭司の衣服のえりにまで流れくだりました。

また北の国境にそびえるヘルモン山は、雨が豊かで見事な杉の大木を沢山育てています。エルサレムの神殿や宮殿にも、この杉材が使われました。ところがエルサレムの都が建てられているシオンの山々には雨が余り降りません。しかしダビデは、神さまがイスラエルの民に注いでくださる祝福と永遠の命の豊かさを、良質の杉材を育てるヘルモンの露に例えました。そして良質の杉の大木をそだてるヘルモン山の雨と同じ様に、シオンの山に注がれる神さまの祝福と永遠の命の露が、イスラエルの民の信仰を大きく育てて下さいますようにと、歌ったのでした。

国の至る所から集まって来て、仲良く礼拝を捧げる国民の上に注がれる豊かな祝福を、国王のダビデが、このような賛美の歌を作って、都で待ち受けています。またそれを知った国民も、道々この歌を歌いながら、ダビデ王が待っている神殿へと、喜び弾んでシオンの山道を登って行ったのでした。皆さんも日曜日ごとに、この歌を歌いながら礼拝にお集まりになりませんか。下川先生ご夫妻も、この歌を歌いつつ、教会員の皆さんを、お迎えになりませんか。

[3]

教会ほど種々雑多な人間の集団はこの世にありません。小学校なら6歳から12歳の児童。大学なら入学試験に合格した学力のある学生。会社なら役にたつだろうと選ばれた能力の持ち主だけの集団です。役にたたなければクビ、除外されてしまいます。ところが教会家族は、「イエスさまを救い主と信じます」と告白しさえすれば、年齢・男女・国籍・経歴・地位・能力・性格など一切を問わずに、誰でも入れます。

だから、これほどまとまり難い素地をもった集団はこの世の中にはないでしょう。ごたごたが起きて当然です。しかしこの世で最もまとまり難い集団だからこそ、ほかのどの集団も持っていない、大切なものを一つ持っているのです。それは惨めな姿で戻って来た息子を、家から飛び出して行って、抱き締め、無条件で迎え入れてくれる父です。この父親は、教会にだけ居て下さっているお方なのです。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。」と優しく彼女の労を労い、慰めて、「しかし、必要なことはただ一つだけだよ。マリアはマリアで自分が良いと思ったことを選んだのだから、それを彼女から取り上げないようにしようよ」と執り成して下さる救い主イエスさまが居てくださるのです。

このイエスさまにしっかり結びつき、教会員があるがままの姿で互いに受け容れ合い、優しく仕え合うことが出来たら、種々雑多な者たちの集団であっても、一つになれなっていけるのではないのでしょうか。一人ひとりが、イエス・キリストにしっかりと結びつくことが欠かせないのです。それだけです。それだけが欠かせないのです。

イエス・キリストはベツレヘムの家畜小屋でお生まれになりました。最も貧しい誕生です。カルバリの丘の十字架の上で殺されました。最も卑しい死です。神の子に相応しくない貧しく卑しい生涯を送られたのに、このお方には優しい愛が溢れていました。私たちがイエス・キリストにしっかり結びついて生きていくならば、身を低くして仕えていく優しい愛が与えられます。そして優しく仕えていくことが出来ます。

我がまま勝手な弟があわれな姿で帰って来た時に、親孝行で働き者の兄が、父と一緒に「よかった、よかった」と食卓の喜びに加わったならば、たまたましも台所で食事の準備をてきぱきやっていた、しっかり者の姉マルタが、食事の準備をそこそこに済ませてマリアの横に並んでイエスさまの膝元に座ったならば、見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵、なんという喜びという歌が、イエスさまの口から語られたことでしょう。

良く働く者がいなければ、社会は困ります。社会の物質的な繁栄は、有能な人たちの働きでもたらされます。でも彼らが無意識のうちに弱い者を押さえつけ、傷つけて、世の中を住みにくくしているのも確かです。

私は小学校6年生の時に肋膜炎(肺結核)で一年休学しました。ですから中学は年子の弟と同じ学年になりました。とても嫌でした。でも私は皆より一才年上でしたので、知識も多く、成績は学年で一番になりました。ところが野球をやり過ぎて高校2年で病気を再発させ、長い療養のため学校を退学しました。するとそれまで目立たなかった弟が頭角を現し、大学時代には学生会会長になって活躍しました。私は年下の弟を押さえつけていたのです。そしてイエスさまは私に、弟に済まないことをしたのだったと気付かせて下さいました。

良く出来る者・強い者が謙遜に身を低くして、小さい者・弱い者に仕えていくことは、大変難しいことです。しかしそれは、どうしても必要なことなのです。そしてイエス・キリストは、私たちにその心を与えて下さいますから、私たちの救い主なのです。

[結] 命のオアシス

「見よ。兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」。これは礼拝に集まる人々によって歌われた歌でした。今日の私たちも、礼拝に集まって心から賛美を歌い、祈りを合せ、御言葉に魂を養われて、七日間の旅路の疲れを癒され、命を豊かにされて、よかったなーと嬉しくなり、「さあもう一週間頑張ろう！またね！」と声を掛け合って、それぞれの持ち場に戻っていこうではありませんか。

教会ほど種々雑多な人間の集団は、この世にありません。でもその教会で、兄弟姉妹があるがままの姿で互いに受け容れ合い、優しく仕え合い、いつも仲良く食卓を囲む教会家族を作り上げていくなれば、それは社会に向かって素晴らしい証になるでしょう。

冷たい飲み水と涼しい木陰を備えて、疲れを癒し元気を回復させてくれるオアシスは、砂漠や荒れ野をたどる旅人たちには、なくてはならぬ命のスポットです。教会を睦み合う命のオアシスにしていきましょう。そうしたら砂漠のようなこの世の旅路をたどる人々が、命の憩いを求めて、一人二人と立ち寄って下さるに違いありません。

日本バプテスト大阪教会の上に、救い主イエス・キリストの御霊が力強く働いてくださいますよう、お祈りいたします。

完